



主張

子どもたちの力を信じて、
子どもたちに明日を託す

新藤 久典

去る三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震は、それまで当たり前のごとくあった日常生活を理不尽にも根こそぎ破壊し尽くしました。尊い命を亡くされた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、家族や近い方を亡くされた方々にお悔やみを申し上げます。また、被災された皆様には一日も早い復興を心からお祈りいたします。

生徒たちの笑顔があふれ、夢や希望を語り合う明るい声が響いていた学舎は一瞬にして奪い去られました。今も、避難所として利用されている学校も多くあり、そこでは、自らあるいは家族が被災者となりながらも、犠牲的精神を発揮し、献身的に避難所運営に尽くされている校長先生をはじめ多くの教職員の皆さんがおられます。心から敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。また、日常生活を取り戻すこともままならないという厳しい状況下にあつて、一日も早く学校を再開し、生徒たちに学校生活を取り戻させたいと奔走して下さっている学校関係者の皆様が多数おられます。そのご努力に感謝いたしますとともに、我々全日本中学校長会は、皆様とともにあることを、そして皆様への支援に全会をあげて取り組むことをお約束いたします。

※全日本中学校長会は、被害が大きかった東北・関東地区六県に対して、特別会計から

(2)

一次見舞金をお送りすることを決定し、直ちに実施しました。さらに、三月二十二日に臨時部長・副部長会を開催し、「東日本大震災支援委員会」の設置をはじめとする対応策の策定を決定し、復興まで支援を続けることを決定いたしました。具体的な対応策等は逐次発表し、全国の会員に協力を要請して参ります。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

さて、このたびの大震災は、これまでの日本及び世界で発生した災害時と異なり、多くの国民が、そして、何よりも多感な思春期の真つ只中にある中学生が、テレビ画面で津波が町を襲い、飲み込んでいくシーンを繰り返し視聴し、その惨劇の目撃者となりました。また、テレビ各局は、長期間にわたり終日、被災地や避難所からの中継放送を行い、日を経るごとに、今回の災害の甚大さを共有することができた、初めてのケースとなりました。

アメリカの詩人エミリ・ディキンソンは「失意の胸へは／だれも踏み入ってはならない／自身が悩み苦しんだという／よほどの特権を持たずしては―」（中島完訳「自然と愛と孤独」国土社刊より）と戒めています。しかし、その前に、己自身が、この惨状を表現する言葉は見出せず、身内を亡くされた方々、避難所での過酷な環境下での生活に耐えておられる方々を慰める言葉の一つすら発することができない無力・無能な己の姿を恥じなければなりません。言葉の無力ではなく、己の人間としての知と徳の欠如・不足を厳しく直視しなければならぬことを思い知りました。

しかし、そうした思いの一方で、詩人の宮澤章二の「『こころ』は／だれにも見えないけれど／『こころづかい』は見える／『思い』は／見えないけれど／『思いやり』は／だ

(3)



れにでも見える」(「行為の意味―青春前期のきみたちに」ごま書房新社刊より)という教えのものつ、重く、深い意味を理解し、思いを行動に表さなければならぬと強く感じました。今、我々が中学生に身に付けさせなければならないことは、エミリ・ディキンソンの指摘のとおり、相手の立場に立って、相手の心を慮ることのできる広くて優しい心であり、宮澤章二の指摘のとおり、思いを行動に表すことのできる強い心と確かな実践力です。避難所となっている学校では、このような過酷な運命を強いられながらもボランティアを申し出て、被災された高齢者や体の不自由な方々のために、食事の世話、トイレ用の水くみや様々な活動に参加している中学生が多数います。また、校内の掲示板に「地震になんて負けないぞー共にがんばりましょう!!!」などのメッセージを掲げ、ともに被災した仲間同士で支え合い、気丈に明るく生きようとしている多数の中学生の姿があります。このような中学生の姿が被災された方々に勇気と希望を与えています。

また、被災された方々のために、自分たちでできることをやろうと立ち上がり、様々な支援のための活動の輪を広げて頑張っている中学生が全国にたくさんいます。彼らの活動やメッセージは、被災地の人々に確実に伝わっています。

過去を振り返ってみても、今ほど、全国の中学生たちが心を通わせ、相手をいたわり、手をつなぎ、共に明日に向かって勇気と希望を育てようとする心一つにしている時代は存在しなかったのではないかと感じています。

我々、教職に身を捧げる者として、今なすべきことは、全国の中学生たちが、確かに感じている、この「we-consciousness われわれ意識」「we-feeling 共感」をさらに大きく膨らませ、いかなる困難にもくじけることなく、明日の日本を、平和な社会を築いていく

のだという意欲・態度、確かな実践的行動力を育ていくことだと強く信じます。中国の作家魯迅はその作品「故郷」の結末を、主人公の甥のホニルと旧友の息子シュイシヨンの間に芽生えた友情に、明日への「希望」を託すことで結んでいます。日本が過去最大の困難に遭遇している今、我々教師にできることは、豊かな心とたくましい身体を備えた中学生を育て、「生きる力」を確実に培うことであり、彼らの存在こそが、明日への希望であることを信じて、明日の日本を彼らにしっかりと託すことであると考えます。高村光太郎や魯迅が喝破したように、私たちの前に道はなく、私たちの後に道はできるのです。全日本中学校長会として、全会員が心一つにして力強く歩んでいきましょう。

(前全日本中学校長会会長・東京都新宿区立新宿西戸山中学校長)